

教師の手引き

1. このテキストが生まれた背景

近年日本語教育が盛んになるにつれ、大学で専門に日本語を勉強する学生だけでなく、一般の社会人の中にも日本語教育に関心をもつ人々が増えてきています。その結果、今までの知識伝達型の、いわゆる詰め込み式の教育スタイルでは、そのような新しいタイプの人々のニーズに応えるのが困難となってきています。これらのタイプの日本語教師予備軍は、ある一定の基準のもとに入学してくる学生とは異なり、学歴、年齢、経験などが様々であり、必ずしも大学型の教育が効果的であるとは限りません。

これらのことから、日本語教育に必要とされる文法の最も基礎的な部分を取り出し、それを知識伝達型ではなく、学習者が主体的に参加し、それぞれの特性を生かしながら身につけていくような授業形態を模索するようになりました。その1つの方法が、「参加型学習スタイル」を取り入れた文法教育です。文法理論の習得に、グループワークを活用することで、ただ単に理論を鵜呑みにするのではなく、自ら考え、主体的にグループ活動に参加し、相互に意見を出し合い、理論を確かめる作業を通じて、体験的に文法理論を身につけていきます。本テキストは、このような文法学習を実践することを目的に作られています。

2. 参加型学習スタイルについて

「参加型学習」という学習スタイルを特に重視する開発教育では、「学習者が、単に受け手や聞き手としてではなく、その学習過程に自主的に協力的に参加することをめざす学習方法」と紹介しています。参加型と呼ばれる活動には様々なものがありますが、共通する特徴は、「学習者の緊張を解き、その場の雰囲気や和ませる中で、学習者が持っている知識や経験、個性や能力を引き出し、相互の意見交流や相互理解を促進すること、そしてその過程で学習者が新しい発見をしていくことを重視していること」になります。

ここで一つ気をつけたいことは、開発教育における参加型学習では、その方法がもっとも重視されます。開発教育協会では、「教育の方法は、本来そのねらいや内容と一致したものが求められる」と述べ、参加型学習というアプローチそのものが、学習の目的となっていることを強調しています。したがって、そのような参加型学習における活動では、正答はなく、参加して話し合うという方法論そのものに意味があるわけです。

これに対して、このテキストにおける「参加型文法学習」ではプロセスが重要であることは否定しませんが、グループによるタスクには予想される正答があり、その正答にいたるまでのプロセスを重視しています。したがって、この点で開発教育の参加型学習とは若干異なるところがありますが、学習者の緊張を解き、学習者の持つ知識や経験を最大限生かし、新しい発見をしていくという参加型の特徴に、何ら変わるところはありません。(以上、開発教育協会(2003)『参加型学習で世界を感じる 開発教育実践ハンドブック』を参照。)

3. 文法教育における「参加型学習」の意義

文法教育に「参加型学習」を取り入れる意義については、以下の点を挙げたいと思います。

(1)プロセス重視による理論の習得

日本語の現象を説明する文法理論を一つの結論として暗記するのではなく、自ら考え検証するという作業を通して、自分の理論として身につけていきます。このようなプロセスを経験することで、その他の文法現象に対しても同様な取り組みができるようになります。したがって、日本語教育の教師として現場に立ったとき、学習者から予想もできないような質問があったとしても、その場で考え、臨機応変に対応できる能力が培われることとなります。

(2)グループ・ワークによる教育効果

社会人受講生の場合、年齢、経験、職業などが異なる多種多様な人々で構成されるため、そのような知識や経験を活用することが可能となります。特に日本語教育経験者と未経験者が混在する場合、経験者の実践的な知識に未経験者の素朴な疑問や発想が加わり、お互いを刺激しあい、議論が深まります。留学生と日本人学生の混成クラスでは、非母語話者の視点と母語話者の視点によって同様な効果が見込まれます。また、グループ内では自分の意見が言いやすく、疑問点などをすぐに確かめることができます。その結果、個人対教師という講義型学習と比べ、より広い視点での考察が可能となり、大きな教育効果が見込まれます。

(3)多様性への気づき

グループ・ワークを通して、同じ日本人でも異なる考え方や語感を持つことに気がつき、一人一人の個性や能力を尊重することを学びます。このような態度は、多様なバックグラウンドを持つ外国人を相手とする日本語教師に特に求められる資質であると思います。また、文法理論についても理路整然とした合理的な体系ばかりではないことを体感し、ひとつの考え方に固執しない柔軟な思考力が養成されることとなります。

(4)充実感の高い学習スタイル

グループワークの中で、与えられたタスクを皆と意見交換をし、納得しながら解いていくので、個人個人の達成感や満足感が強まります。また、皆で話し合いながらの活動が続くので、楽しく学習を進めることができます。民間の日本語教師養成講座などで一般的に行われている講義時間の3時間は、受身型の講義ではつらいものですが、参加型であればあつという間に過ぎてしまいます。仕事帰りの疲れた社会人受講生でも集中して参加することが可能となります。

4. 参加型学習の注意点

筆者のこれまでの経験から、参加型学習を取り入れた教育においては、以下の点に留意すべきであると思います。

(1)参加型の意義を理解してもらう

初回の講義で参加型学習について説明をし、その目的を学習者によく理解してもらう必要があります。全員で協調・協力しながら進めることが求められるからです。時々一人だけ文法に詳しい人がいて、その人が一人でグループをリードして進めてしまうことがあります。これでは、グループワークの意味がありません。そのような場合は、よくわかる人にはアドバイス役になってもらい、必要に応じて説明してもらうなどして、全員が納得できるように活動を進めていきます。

(2)グループワークが苦手な人に配慮する

大多数の人には、グループワークは楽しく文法を学んでいく活動として受け入れてもらえますが、中には一人でじっくりと考えながら進めることを希望する人がいます。また、その日の体調によって、あまり人とは交わりたくない人もいます。したがって、そのような人にもグループワークに加わらない権利を保障する必要があります。具体的には、授業の初めに、グループワークには加わりたくない人の意思を確認し、そのような人たちの席を確保するという事です。その場合、一人でやることも文法を勉強する一つの方法であり、決して恥ずかしいことではないことをクラスで説明します。こうすることで、グループ活動でも一人でもどちらでも構わないという気持ちになり、強制的ではないクラス運営へとつながります。

(3)毎回グループを変える

グループは毎回変えます。こうすることで、クラスの参加者全員が知りあうことになり、クラスの多様性に触れるとともに、クラスとしての一体感が醸成されます。筆者の経験ではグループ人数は最大4名です。これ以上増えると、話し合いに積極的に参加しない人が出てきます。3～4名の少人数グループになるように調整します。毎回新しいグループで気持ちをリフレッシュしながら、お互いに協力して学んでいく環境を整えます。

(4)教師はファシリテーター

ファシリテーターとは、学習者が最大限の学びを得られるように、側面からサポートする役目の人を言います。教師は文法を教える人ではなく、理論をわかりやすく説明する人であり、それを身につけていくのは学習者自身であるということを理解してください。したがって、学習者からの質問に対しても、単に答えを教えるのではなく、一緒に考えて答えを見つけるという態度に徹していただきたいと思います。考えるプロセスを飛び越えて、ただ答えだけを知りたがる学習者もいますが、その場合、学習者自身で考えて答えを見つけようとするようなサポートをしていただきたいと思います。また、時々、学習者からびっくりするような意見が出る場合があります。そのような考えにも、一理あることが多いものです。こうした学習者からの意見にも誠意を持って耳を傾け、できるだけ尊重する姿勢を取ることが重要であると思います。

5. テキストの具体的な進め方

第7章（ムード）、第8章（複文の構造）、特別編（品詞分類）を除き、それぞれの章は「その1」と「その2」から成る2部構成となっています。テキストを進める基本的な流れは以下の通りです。

(1)文法説明（テキストの文法事項の説明）

テキストに沿って、書かれた内容を説明します。テキストだけを見ながら理解できるように、図表やイラストを数多く入れていますので、それらを活用しながら解説してください。必要に応じて板書して下さってもかまいません。

(2)確認しよう（文法の基礎的事項の確認）

教師が説明した内容について確認する問題です。わかりやすい問題を用意しています。まずは

学習者自身でやってもらい、その後、グループで答えを確認します。その後、教師と答え合わせをします。グループで答えを確認しているので、学習者に当ててもいいと思います。設問にもよりますが、全体で15分程度となります。

(3)考えよう（文法理論の背景の考察）

文法項目によっては、その背景を考える必要がある場合があります。この設問では、最初からグループで意見交換をしてもらいます。何でもいいから、意見を出し合うことが重要です。時間は15分程度が目安です。結論が出ていなくても、時間が来たら話し合いを打ち切り、それぞれのグループにどのような話し合いをしたのかを聞いてみます。その上で、教師から基本的な考え方をクラスに伝えます。グループの中から意見を聞きながら、クラスで話し合います。教師対クラスという図式になります。

(4)練習しよう（「やってみよう」を解くための準備問題）

その後にある「やってみよう」のウォームアップ的な問題です。まずは、学習者自身で問題を解き、その後にグループで確認します。この「練習しよう」では、これまで説明を受けた文法理論の基本的な考え方を確実に理解することが目的です。ここで理解ができないと、次の「やってみよう」でつまづいてしまいます。わからない人はグループの人の助けを借りて、しっかりと理解することが求められます。教師は教室を回りながら、理解が出来ていない人がいないかを確認します。必要に応じて、助言を与えます。最後に、クラス全体で答え合わせをします。時間は15分程度が目安です。

(5)やってみよう（文法理論を実践的に考えるタスク）

「やってみよう」は、グループ全員で協力しながら、与えられたタスクを完成します。「やってみよう」はその章で扱った文法理論を実践的に運用する問題で、数も多く、テキストの中では重要な位置を占めます。「やってみよう」では、個人では考えず、始めから皆と一緒に1つ1つの問題を考えて解いていきます。この活動においては全員で作業ができるように活動用の「タスク用紙」を用意していますので、ご活用ください（このホームページの最後からダウンロードできます。）。この用紙を皆でハサミや定規などを使って切り取り、一つ一つ話し合いながら分類を進めます。このやり方には以下の利点が見込まれます。

①気分転換

タスク用紙を切り取る作業によって体を動かすことになり、気分転換となります。

②ゲーム感覚

本来であれば難しい文法問題ですが、ゲーム感覚で取り組むことができます。皆で知恵を絞って考えるため、楽しく共同作業することができます。

③分類・整理しやすい

1つ1つの問題が切り取られているので整理しやすく、視覚的にも理解しやすくなります。また、それぞれの問題の移動が簡単なので、一通りの作業が終わってからの修正も簡単にできます。

「やってみよう」は、時間を競うゲームではないので、皆で手分けしてやることのないように十分に気をつけてください。グループ全員で確認しながら、1つ1つの問題の解答を見つけてい

きます。しかし、他のグループと比べてあまりに遅いグループがある場合にはヒントを与えるなどしてスムーズに活動が進むようにサポートします。終了したグループには手を上げるように指示しておき、教師は終了したグループの分類を確認し、間違っているようであれば、どこが違っているかを伝え、再度考えてもらいます。最後に、タスクの解答と解説（別冊にもありますが、ページの途中から記載されているため、表裏1枚以内に収まるように、「タスク用紙」と一緒に収録してあります。）をコピーして渡し、最終確認してもらいます。時間は30分程度は必要となります。

「やってみよう」では、グループにヒントを与えると活動がスムーズに進みます。私がよくやるのは、分類する活動であれば、途中でそれぞれの分類ごとの数を伝えます。分類の数に合わせて考えることで、考察が容易になるからです。

(6)まとめよう（文法事項の整理）

「やってみよう」で行った分類を表などにまとめ、この章で扱った文法事項を整理します。文法を体系的に感じ取れるようになるのが狙いです。

(7)文法チェック（追加の文法情報）

テキストの内容に関連する文法事項です。基礎的な文法事項に加えて、知っておいたほうがいいと思われる情報を掲載しています。本文と合わせてご説明ください。

(8)日本語教育の観点から（理論と実践の関係）

この章で扱った文法理論がどのように日本語教育と関係しているのかを伝えます。文法理論は日本語教師にとって必要な知識ですが、そのまま学習者に伝えるものではないことを知ってもらいます。文法理論を具体的にどのように教えるかは教授法の範疇となります。実際の教育現場では、それぞれの教科書の記述に沿う形で、文法項目を導入して説明していくことを理解してもらってください。

(9)まとめ

各章で扱った文法事項をまとめてあります。それぞれの章で何をやったのかを復習します。その上で、グループで話し合いながら、練習問題をやってもらいます。最後に教師がクラスで解答を確認します。時間的には20分程度です。

(10)COLUMN

日本語文法に関する興味深いトピックや必要であると思われる情報を選び、解説しています。できるだけ各章の内容に関連したトピックを選んでいますが、中には「主語廃止論」など、これまでに大きな文法論争となっているものも扱っています。テキストの内容とは直接関係しないものもありますが、時間があるようであれば、紹介してください。

(11)付録

付録は、各章で扱う文法事項の全体像が見えるように工夫してあります。このテキストでは代表的な表現で文法を考察し、それ以外の多くの表現については、「付録」で確認してもらいます。特に「アスペクト」と「ムード」には様々な表現がありますが、基本的な概念や理論が把握でき

れば、その他の表現を理解するのはそれほど難しくはありません。したがって、これらの章では代表的な表現でしっかりと基本理論を理解することを目指します。また、文法学習で必要とされる「品詞分類」、「述語の活用表」、「学校文法と日本語文法」、「敬語の表現」などを掲載し、その他の文法書を探さなくても、補足的な情報が手に入るように配慮してあります。

12 解答と解説

各章が終わるごとに、その章の「解答と解説」を読んで復習をしてもらいます。あらかじめ「解答と解説」を外してテキスト本体だけを受講者に渡してある教師は、その章の「解答と解説」のコピーを渡してください（この場合、テキストがすべて終了した時点で別冊の「解答と解説」は受講者に返します。）。大事なことは、各章ごとに「解答と解説」とともに、自分の考えたやり方が正しかったのか学習者自身に復習してもらうことです。また、欠席した人や理解が進まなかった人は「解答と解説」を使って、自習し、遅れを取り戻すことができます。

◇グループ分けの方法◇

グループ分けの一番簡単な方法は、参加者数を4で割り（割り切れない場合は割り切れた数に1を足します）、グループ数を決めた後、順番に1から全体のグループ数までの数字を声に出して言ってもらいます。これを何度も繰り返します。この数字が各自のグループの数字になります。例えば、18名の受講生なら、「 $18 \div 4$ 」で「4余り2」となりますので、グループ数は5（ $4 + 1$ ）になります。受講者全員の方に端から1、2、3、4、5、1、2、3、4、5、1、2...という具合に数を言ってもらいます。これで、仲のいい友達同士で近くに座っていてもバラバラのグループになります。黒板（ホワイトボード）にグループの位置を書き、全員がグループの場所に移動します。このグループ分けは男性と女性の比率を同じにしたり、日本語教育経験者と未経験者を均等よくグループ分けしたりするのに便利です。たとえば、男女の比率を同じにするのであれば、まず女性だけに番号を言ってもらい、その後、男性に言ってもらうと均等な配分になります。経験・未経験者も同様にするわけです。

この方法は簡単にクラスをグループ分けできる半面、偶然が重なることもあり、テキストが終わるまでにクラス全員が顔を合わせることができかどうかは不明です。したがって、クラスの名簿により、全員が一度は顔が合うように、毎回グループを決定しておき、出席を取る時にグループ名を伝えるという方法もあります。

グループの席の作り方ですが、机を合わせてグループ席を作ると、教師に背を向けてしまう人が出てくるため、机はそのままにして座っていただきます。グループ作業をするときだけ、前の席の人が後ろを向き、話し合いを行います。「やってみよう」では、後ろの人の机の上で作業をしていただきます。こうすることで、机の移動も必要なく、教師はグループの座る席だけを指定すれば良いことになり、スムーズに教室運営を行うことができます。

(13)確認クイズ

時間があれば、各章が終わった後で、「確認クイズ」を行います。「確認クイズ」の内容はテキストでやった練習問題とほぼ同じレベルの問題となっており、学習者がどれくらいその章の内容を理解したのかをチェックすることができます。理解度の目安は、15点満点で10点以上です。10点以下の人はしっかりと理解できていないことになり、もう一度復習することが望まれます。その章の問題が確実に解けるようになるまで、「解答と解説」を頼りに再度その章の設問に取り組むように学習者に伝えます。採点した答案は、「確認クイズ」の解答と解説と一緒に学習者に返却します。また、学習者自身による自主採点で行う方法もあります。なお、「確認クイズ」と「確認クイズの解答と解説」はテキストには収録されていませんので、このホームページの最後からダウンロードしてください。

10. 全体の時間配分

各章に必要なとされる時間ですが、筆者の経験から3時間から4時間半ぐらいです。受講者（大学生、一般社会人、留学生など）やクラスの大きさなどによっても変わります。各章を3時間で終えていく場合は、時間が足りなくなることがあります（特に第4章）。その場合、「まとめ」は「解答と解説」を渡して、学習者自身で確認してもらった方がいいかもしれません。また、「コラム」についてもクラスで扱うことができなくなる可能性があります。「コラム」を含め、各章ごとにしっかりと進めたい方は、4時間程度の時間で各章が終わるように計画を立てることをお勧めします。第1章から始める場合は、時間が余る時に特別編をやるというやり方もいいかもしれません。基本は第1～8章までで、時間調整に「特別編」を使うというやり方です。

また、学習者数の適性人数ですが、10名～30名前後が一番理想的であると感じます。50名前後で教えたことがあります。かなり大変でした。40名を超える場合、グループ数が10以上となり、教師一人では「やってみよう」のチェックが困難となります。その場合、終わったグループには、「タスクの解答と解説（タスク用紙と一緒に収録）」のコピーを渡し、自分たちでチェックしてもらおうという方がいいかと思います。

皆さんの創意工夫のもと、ぜひこのテキストが皆さんの文法教育の現場で大いに活用されることを願っています。このテキストを使っの講義やテキストの教え方や内容についての講習などを希望される団体は、以下のアドレスまでご連絡ください (harasawait suo@ybb.ne.jp)。できるかぎり、対応させていただきたいと考えています。

タスク用紙 (+解答と解説)

確認クイズ (+解答と解説)